

赤い衝撃「明治赤絵」展

会期:2018年4月14日(土)～7月1日(日)

会場:< GAS MUSEUM がす資料館>ガス灯館2階「ギャラリー」

ごあいさつ

GAS MUSEUM がす資料館では、2018年度第一回企画展として、2018年4月14日(土)から7月1日(日)までの期間、『赤い衝撃「明治赤絵」』展を開催します。

江戸時代の錦絵では「赤」は紅や朱などの自然由来の高価な染料でしたが、明治を迎え、海外から輸入された安価な赤い染料が利用できるようになると、鮮やかな赤い色をふんだんに使用した錦絵が数多く制作されました。明治に入り、人々の暮らしに大きな影響を与えた開化文物や風俗は格好の題材となり、作品では空を赤く描き、多くの錦絵に描かれた桜は赤を基調に表され、背景に赤を多用した作品が数多く制作されるなど、赤は文明開化を象徴する色となりました。

赤を多用する作品は「明治赤絵(あかえ)」とも呼ばれ、明治錦絵の特徴の一つでもある色合いとなりますが、美的観点から見ると評価を落とすことになりました。

今回展示会では、文明開化の時代を象徴する、刺激的な赤い色が多用された作品を紹介し、時代の変化の喧騒を伝える「明治赤絵」を展示紹介します。

GAS MUSEUM がす資料館

■展示作品一覧

【展示解説】

学芸員 高橋 豊

【錦絵の赤】

江戸時代までの錦絵に用いられた絵の具には、紅花(ベニバナ)を原料とする「紅(べに)」などの植物由来の物、硫化水銀の「辰砂(しんしゃ)」や四酸化三鉛を主成分とする「鉛丹(えんたん)」などの鉱物由来のものが用いられていました。

鮮やかな赤が表現できる「紅」ですが、原料の紅花が大量に必要なため、大変高価なものでした。

明治時代になると、人工染料による赤い色「アニリン染料」が利用できるようになり、安価な赤い絵の具の登場で、錦絵の中に「赤」が多用されるようになりました。

石炭を乾留して石炭ガスを製造する過程で発生するコールタールより1856年にイギリスのパーキン(W・H・Perkin)が発見した、世界最初の人工染料「モーブ(Mauve)」の登場が化学染料のはじまりです。明治錦絵の赤には「アニリン染料」が使われているといわれていますが、近年の錦絵研究では、他の染料の利用の可能性も挙げられています。



上より右回りに
「紅花」、「丹」、
「アニリン染料」、
「辰砂」



1)東京名所之内 銀座通煉瓦造鉄道馬車往復図 歌川広重(三代) 明治15年(1882)

作品は銀座四丁目交差点を北方向に眺めた様子を描いています。

この交差点の角には、当時新聞社が集まっており、作品左奥の建物は「朝野新聞」の社屋が、右手前の建物は「東洋新報」の社屋があり、現在その場所には「和光」と「三越」を見ることができます。

また作品には鉄道馬車が走る姿と合わせ、右上に鉄道馬車の運賃や利用方法が紹介されており、鉄道馬車の紹介も兼ねています。



2)東京名所 鉄道馬車往復上野公園山下之図
歌川広重(三代) 明治15年(1882)



3)海運橋為換坐之図
昇斎一景 明治5年(1872)

4)志ん版十二階図
みの忠 年代不明

【高く赤い空】

明治錦絵の特徴の一つに、赤く彩られた空があります。夕方でもない昼を描いたと考えられるいくつもの作品では、作品に見える高い空に赤い色が配色されています。

赤い色は地平線に向かって薄くぼかし、空の色の変化を表現しています。

5)新吉原江戸町二丁目 五勢楼
宝槌楼合併 青楼五階之真図
歌川芳虎 明治4年(1871)



6)横浜伊勢山風景図
歌川芳村 明治20年(1887)

かつての横浜駅(現在の桜木町駅)の西に見える高台が、伊勢山皇大神宮が鎮座する伊勢山です。以前は野毛山と呼ばれましたが、明治4年(1871)に社殿が竣工すると、名称が変わりました。かつて参道沿いの桜は横浜有数の桜の名所で、社紋の桜はこれに由来しています。作品下よりそびえ立つレンガ造りの煙突は、横浜のガス工場のものです。



7)東京名所
愛宕山山上ヨリ海上みはらし
歌川国利 明治23年(1890)



8)東京名所之内 吾妻橋新築之図
井上安治 明治20年(1887)

【地平線の赤い空】

当時の作品の中には、地平線附近を赤く彩った作品もあります。

このような作品の場合、地平線の向こうに見える富士山や、立ちのぼる煙の姿を白抜きに単純化して表現するほか、高い空の部分に青い色を配色することで、独特な空の表現を作品の中に見ることができます。



9)東京名所 室町三井富士遠景
歌川国政(四代) 明治7年(1874)

10)第一大区従京橋新橋迄
煉瓦石造商家蕃昌貴賤蕪澤盛景
歌川国輝(二代) 明治6年(1873)

11)東京名所 赤坂仮皇居
歌川国利 明治13年(1880)



12)神田祭礼だし一覧
歌川国利 年代不明

江戸三大祭りの一つに挙げられる神田祭は、江戸から明治にかけては、豪華絢爛な山車や練り物が人々の目を引きました。その後、東京の街中に電線が張り巡らされるようになると、明治22年(1889)を最後に、祭りで山車は曳かれなくなりました。作品は歌川国利が歌川芳藤の作品を模して制作し、右下の団扇に「くに」「とし」とも記されています。

【空間を区切る赤】

展示作品に見られる赤い雲や空は、本来作品の構図に収めることが難しい対象を、赤い色を背景に距離や空間を超越し、1つの作品の構図に収める役割をしています。

また赤い雲や赤い空は、画面内の不要な対象物を隠す効果も担っています。

13)皇居御造営略景

小林幾英

明治21年(1888)



14)東京浅草金龍山並ニ鉄道馬車繁栄之図

歌川重清

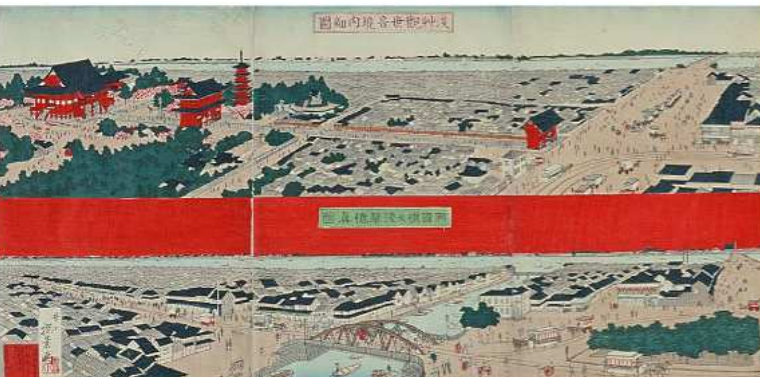
明治15年(1882)



15)東京新富座真図

安達吟光

明治17年(1884)



16)(上)浅草観世音境内細図

(下)両国橋及浅草橋真図

井上安治

年代不明

作品では、浅草橋から浅草寺までの街並みの様子を作品内に収めるため、上下に分割して描いています。境を明確にするため、下の作品では空全面を赤い色で描き、上の作品の青くぼかしの入る空と表現を変えています。

浅草橋南側に見える赤白の市松模様のある建物は、画家の木村莊八の生家「いろは牛肉店第八支店」を描いていると言われています。

【人物背景の赤】

作品では、歌舞伎役者をはじめとした、取り上げた人物の背景を赤い色で表すことで、対象人物を引き立たせる役割を担っています。



17)開化廿四好 時計

豊原国周

明治10年(1877)



18)役者評判記姿競

安達吟光

明治12年(1879)

19)東京名所六ヶ撰の内

豊原国周

吉原見かへりのお艶

明治23年(1890)



20)新富座二番目狂言 漂流奇譚西洋劇

歌川国政(四代)

明治12年(1879)

この芝居は新富座で明治12年(1879)9月1日に初日を迎えた劇です。

ストーリーは下田沖で遭難した清水五右衛門(三代目中村仲蔵)とその息子の三保蔵(九代目市川団十郎)をめぐる物語で、劇の場面はアメリカ西海岸から東海岸、イギリスのロンドン、フランスのパリへと移り、オペラ座で二人が再会する場面で終了します。

劇中のオペラ座の場面では、劇中劇として外国人によるオペラが上演される場面も登場しますが、興行的には大失敗となりました。

作品左上にはそのオペラの様子が描かれ、歌舞伎役者たちとの違いを、赤い背景により区別しています。

21)東京の花纏づくし名勝会 商行銀行

豊原国周・歌川広重(三代)

明治8年(1875)



22)風船乗評判高樓

歌川国政(五代) 明治24年(1891)

この芝居は歌舞伎座で明治24年(1891)1月8日に初日を迎えた劇です。

作者の河竹黙阿弥は、イギリス人気球乗りパーシバル・スペンサーによる、前年10月の横浜公園、翌月の上野公園での興行を元に制作しました。

スペンサー役の五代目尾上菊五郎からの要望でもあり、劇中では気球を舞台上で上げ、菊五郎は英文の演説を行い、通訳が内容を訳して聞かせる場面もありました。

23)東京新開名勝図会 浅草山谷橋
歌川芳虎 明治12年(1879)



24)扶桑高貴鏡

楊洲周延 明治19年(1886)

【洋風建築と赤い桜】

文明開化の窓口となった銀座煉瓦街では、建物前の通りの街路樹として、松や楓とともに桜が植えられていました。

煉瓦街を取り上げた作品には、桜の咲く姿が描かれていますが、開化風物と満開の桜の組合せは他の多くの作品に取り入れられてゆきました。

また時代が経つにつれ、満開の桜の姿も赤い色が強調されるようになります。

25)東京名所図会 尾張町日々新聞日報社
歌川広重(三代) 明治13年(1880)



26)東京名所 江戸橋郵便局真景

楊堂玉英 明治24年(1891)

【全面の赤】

浅草寺風景を描いた作品ですが、社殿をはじめとした境内の建物、空や上野の山と距離を隔てる雲、境内に咲き誇る桜が赤い色で表現されています。

このほか仲見世や凌雲閣のレンガの赤茶色も含めると、作品全面が赤系統で表現され、現実離れした色使いの作品となっています。



27)東京名勝 浅草観音之図

歌川国輝(三代) 明治25年(1892)

28)新版勝手道具づくし

作者不詳

おもな参考文献

黙阿弥 河竹登志夫 (株)文藝春秋 1993年
明治版画史 岩切信一郎 (株)吉川弘文館 2009年
幕末明治期の錦絵に用いられた色材調査 島津美子
国立歴史民俗博物館研究報告 第200集 2016年

GAS MUSEUM がす資料館 企画展ご案内郵送申込について

ご来館ありがとうございます。これから3ヶ月ごとに開催されます、「GAS MUSEUMがす資料館 企画展」のご案内はがきの郵送をご希望の方は、官製ハガキに ①氏名 ②連絡先住所 ③年齢 ④電話番号 ⑤感想・意見 ⑥今後希望する企画展、をご記入の上、下記の住所までお申し込みください。

次回より約1年間、毎企画展ごとにご案内ハガキを無料で郵送します。

(ハガキ持参で来館された方は、そのまま継続して登録されます)

〒187-0001 東京都小平市大沼町4-31-25 GAS MUSEUMがす資料館「ご案内ハガキ」係

TEL(042)342-1715 FAX(042)342-8057

《当館のお客様情報(個人情報)は、当館イベント運営に必要な業務を含め、当館に関連する企画、及びサービスのご案内のために使用いたします。》